

生活科における生命尊重の教育についての一考察 ～ 飼育活動から精神的な自立へ～

松本みゆき* 野田敦敬**

*愛知教育大学大学院学生

**生活科教育講座

A Study about Education of Life Esteem in the Life Environment Studies

Miyuki MATSUMOTO* and Atsunori NODA**

* Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

** Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

研究の目的

生命尊重に関する指導が、平成元年版小学校学習指導要領道徳編に組み込まれて以後、生活科においても学習指導要領の内容(7)で、「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする」¹⁾ことが明記されている。

生命尊重の心が求められる背景には、身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を動かされたりする経験が少なくなってきたり、テレビゲームなど仮想空間で遊ぶ機会が多くなり、生命の重さを実感する直接体験が少なくなってきたり、少子化などに伴う他者とのコミュニケーションを深める機会の減少により、多くの人々に支えられて毎日をご過せることの有り難みを感じられる経験が少なくなっている²⁾ことなどが考えられている。また、「生命は、一度失えば生き返らないことは本能的にわかっていて、人を殺すなどということは有り得ない、と考えるのが一般」³⁾であったはずが、生命を軽視するような事件が多く起きていることから、疑問視せざるを得ない。

こうした中、平成20年1月に中教審より出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)」⁴⁾において、「児童を取り巻く環境の変化を考慮し、安全教育を充実することや自然の素晴らしさ、生命の尊さを実感する学習活動を充実する」ことが生活科の改善の基本方針のひとつにあげられたように、生命の尊さを実感す

る学習活動としての動物飼育が担う役割は、より一層重要であると考えられる。

このように、生命を尊重する教育の重要性は、広く認められ、生命尊重をスローガンに掲げる教育が広がってきている。そして、日本全国の多くの小学校で学校飼育動物が飼育されている。しかし、その活用には学校差が大きい。動物飼育の活用差の大きい原因として、日常の動物管理の問題やアレルギーの問題がよくあげられるが、その他にも、どのように生命を尊重させるのか、何のために動物飼育を行うのか等、動物飼育の教育上の目的が明確でないことも原因ではないかと考える。

そこで、本研究では動物飼育の効果から、生命尊重の教育について再考し、動物飼育の問題点や意義を再検討しながら生活科における生命尊重の教育を具体化することを目的とする。

動物飼育の効果の検証

動物を飼育することで、実際に得られる効果を教師と子ども両方の調査から検討する。

1 教師が感じる動物飼育の効果

中川美穂子が平成14年に調査した、幼稚園、小学校教師(計71名回答)から得た動物飼育の子どもへの効果は表1のようであった⁵⁾。表中の割合(%)は教師が認めた飼育動物の事例数(183)の割合を表している。

表1より、項目1の「慈しみ思いやりなどが育つ」ことが多くの教師が感じる効果であることがわかる。事例として、「世話をするうち動物への優しい心が芽生え、人にも優しくなる」「1年以上教室で動物を飼っている3年生のクラスで、授業中に机の上に嘔吐した子

がいたが、誰も汚いと言わなかった」ことが紹介されている。

この調査の結果、項目1以外はそれほど高い割合を示さず、最も少ない効果は、項目10の「自信を持つ」ことであり、「教室ではなかなか存在感をもてない子が、飼育を通し自信をもち明るくなった」ことがあげられている。

表1 動物飼育の子どもへの効果

1. 慈しみ思いやりなどが育つ62%
2. 交友関係が和やかになる34%
3. 責任感が育つ34%
4. 生命を実感する28%
5. 子どもの気持ちを癒す27%
6. 生物を知る25%
7. 親・子・学校を結ぶ14%
8. 不登校改善13%
9. クラスがまとまる13%
10. 自信を持つ 4%

2 子どもたちへのアンケートからみる飼育の効果

野田敦敬らが平成17年に行った「生活科で育った学力についての調査研究」⁶⁾から、子どもたちが回答したアンケートより飼育の効果を探る。調査対象は小学校3年生、6年生、中学校3年生、高等学校3年生である。

まず、生活科で身に付いた力の調査のうち、「動物を飼ったり、植物を育てたりするなど生き物に親しむことができるようになった」ことについての回答数は1691人(2544人中)と、20項目中最も多い結果であった。しかし、心に残る生活科の活動として最も回答人数が多かった(1707人)活動は「アサガオやチューリップなどの草花やミニトマトやキュウリなどの野菜を育てた」活動であった。さらに、飼育活動の取り扱いは、「植物栽培が7割強、動物飼育が3割弱」⁷⁾といわれている。地域差はあるものの、動物飼育の実施の割合は低いものとなっていることから、先の調査でここでの親しむことができるようになった生き物が動物であるとは一概に言えない。

しかし、この調査の自由記述には、「生活科をやって動物とふれ合えるようになった」「動物と仲良くなれて楽しかった」「動物によく親しめたのが一番よかった」「動物とかを大切にすようになった」のように動物飼育に関するものも多く、表1と同様に、生活科においても慈しみ、思いやりなどが育つ効果は高いといえるだろう。

生命尊重の教育

章でみてきたように、動物飼育によって子どもは

動物と仲良くなり、親しむ。そして慈しみ、思いやりなどが育つことがわかった。しかし、この結果だけから生命尊重の心が育ったと安易にいえるだろうか。青少年による、動物や家族を傷つける事件のニュースは、後を絶たない。身近な人との間のトラブルを解決できず、無関係な人をも巻き込む事件も多発している。

嶋野道弘は、子どもが自他の生命の大切さを実感し、「自分を傷つけない」、「他人を傷つけない」といった基本的な倫理観を踏まえて、生命を尊重した行動がとれるようにすることを、命を大切にす教育⁸⁾としている。

また、近藤卓は、「本当に自分自身のいのちが大切だと思えると、他者を傷つけたりすることもない。他者を傷つけるという行為は、自分のところをも傷つけてしまうためである」⁹⁾と述べている。

つまり、ただ動物を慈しみ、思いやりをもつだけでなく、自分を大切にす、自分も他人も傷つけない心が育ってこそ生命尊重の教育といえるのではないだろうか。

永田繁雄は、子どもたちに育てたい道徳性を、「じぶん」「なかま」「いのち」の三つの側面から捉え、これらの側面が子どもの内面において統合されたとき「共によりよく生きよう」とする力となり、確かな自己の形成につながると考えている¹⁰⁾。ここでいう「じぶん」とは、子どもの中にある「よりよく生きよう」とする心の力に気付かせ、それを伸ばしていこうとする意欲を育てることである。「なかま」とは、子どもの中の「共に生きよう」とする心に気付かせ、その力を育てるために、他の人とのかかわりを発展させていくことである。また、「いのち」とは「じぶん」「なかま」を支える基盤としての「自他の生命を尊ぶ」心、いわば、自分を大切にするとともに他をも心から大切にしようとする心を育てることとしている。

本研究では、生命の尊さを実感する学習活動としての動物飼育という場で、動物を慈しみ思いやりを持つだけでなく、子どもにとっての「なかま」を動物飼育

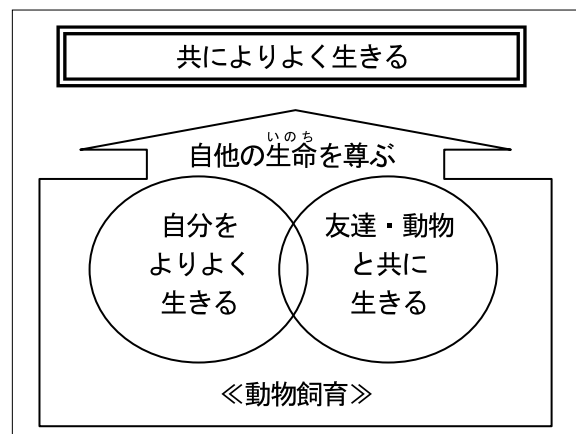


図1 動物飼育における生命尊重の心が育つ仮説図

の中でかかわり合う友達、動物と捉える。そして、図1のように動物飼育の場で自分をよりよく生き、なま(=友達・動物)と共に生きながら自他の生命を尊び、共によりよく生きていくことを生命尊重の教育として仮説する。

動物飼育の問題点と意義

章では、動物飼育活動の中で自分をよりよく生き、友達や動物とかかわりながら自他の生命を尊ぶことを生命尊重の教育として仮説した。本研究の土台となるのは図1で示したように「動物飼育」である。動物の種類や数等は各学校で判断することになるが、「動物は『生命をもっている生き物』であり、適切な飼育環境がなければ、望ましい飼育はできない」¹¹⁾と嶋野道弘が述べているように、動物の飼育環境についての配慮が必要である。本章では、自他の生命を尊ぶ動物飼育活動を可能にするために、動物飼育の問題点や意義を再検討する。

1 動物飼育をめぐる問題点

動物飼育については、「動物のもたらす社会的・情緒的効果も、教科上の教育効果もともに動物が適切に管理・飼育されていることが大前提であり、多大なストレスが加わる飼育環境に置かれた動物からは、決してどのような効果も期待できない」¹²⁾という指摘がある。しかし、現在の飼育動物の現状を須田沖夫(獣医師)は、

1. 飼育者側の知識不足による問題
 - 1) 生まれたばかりの赤肌のウサギを病気と思い、埋めてしまう
 - 2) ウサギが異常繁殖し、環境悪化で死亡する個体が増加する
 - 3) 正しい知識をもって、子どもに説明できる先生が少ない
2. 予算不足による問題
 - 1) 餌が買えないため、教師がウサギを殺害する
 - 2) 傷病の治療費が計上されないので、手当もせず、放置する
 - 3) 飼育小屋の修理ができない
3. 不適切な管理による問題
 - 1) 夜間、犬などに襲われ、ウサギやニワトリが殺された
 - 2) だれが、いつから動物たちを飼育しているのか誰も知らない
 - 3) 動物の体が汚れていて、気軽に触れたり、抱いたりする気が起らない

¹³⁾と述べている。中川美穂子は、この他、動物に接する児童、学校、行政の考え方¹⁴⁾にも問題があるとしている。

日本獣医師会学校飼育動物委員会が報告した「学校飼育活動の推進について」においても、動物飼育の担い手、飼育動物の選定及び飼育施設・設備について問題視されている。中でも、「教員が動物飼育に対する使命感を持っていても、動物飼育に対する知識が乏しければ、不適切な飼養管理により動物が健康状態を損ね、過繁殖の結果、狭い小屋の中で動物間の争いが起こる等、飼養環境を悪化させる事例も見られる。」¹⁵⁾ことを報告している。

例えば、各小学校でよく飼育されるウサギは、雄は生後4～9ヵ月、雌は6～10ヵ月で繁殖可能になる。一匹のウサギで一回に4～10匹、一年に8回まで子どもを産むことができる¹⁶⁾ため、相当飼育環境に配慮しなくてはならない。また、ウサギは一匹の雄に対して複数の雌で生活することが本来の姿であるから、雄が複数匹いれば闘争が絶えなくなる。「オス同士の争いで瀕死の重傷を負ったウサギ」を救うことから生命の尊さを感じたという実践例¹⁷⁾がある。しかし、学習指導要領には「専門的な知識をもった地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連携して、よりよい体験を与える環境を整える必要がある」¹⁸⁾ことが明記されている。

無藤隆は、「学校での動物飼育の在り方は、学校という教育の目的の場にふさわしく、子ども集団と少数の教師という組み合わせの中で可能なものとして、かつ動物の愛護の精神と両立可能でなければならない」としている。さらに、「飼い方を子どもの発見に委ねるのがよいのではない。子どもが発見し、工夫することを促すことは教育の基本であるが、同時に、動物を大事にし愛護するという姿勢も指導していくべきである。最小限、動物を死なさず、苦しめることのない飼い方は初めから教師が理解して、子どもに教えてよいのである。その上で、動物の生態や行動についていくらかでも面白い発見は可能である。」¹⁹⁾と述べている。

人と動物の関係についての研究者である横山章光は、動物を介在させた教育の目的の一つに、「動物との付き合い方を学ぶ」ことをあげている。この「動物との付き合い方」とは、動物にとっての快・不快のサインを知り、「相手の立場に立って考えること」、「動物福祉」について学ぶことである²⁰⁾としている。また、動物の性質を理解して、適切に飼育できない場合には、逆に動物虐待を教えることにもなりかねない²¹⁾と指摘する獣医師もいる。動物の生命を脅かすような飼育方法では、動物との付き合い方は学べないであろう。つまり、子どもと関わらせる動物は、適切な環境で飼育されている、健康な動物でなくては効果が得られないといえる。

2 動物飼育の意義

動物飼育の効果，生命尊重の考え方，動物飼育をめぐる問題点を踏まえ，これまでに提唱されている動物飼育の意義について改めて考えてみたい。

獣医師でもあり，全国学校飼育動物研究会事務局長でもある中川美穂子は，以下の六点を飼育の意義としてあげている²²⁾。

- 1．生命力を養う自然体験のひとつ
- 2．我と他を教え，謙虚さと共感を養う
- 3．子どもの自尊心を養い，社会性を持たせる
- 4．生命を理解させる
- 5．自発性を養い，判断力，決断力を養う
- 6．動物との接し方は，子どもの心を表す

また，獣医師である須田沖夫は，

- 1．動物との触れ合いにより，子どもの心が開かれ，表情豊かになる
- 2．孤立した子どもが飼育動物に触れ，世話することで，級友との語らいができる
- 3．生きた動物に直接接することで，ものの見方や考え方が変わり学習意欲も見られる
- 4．生命尊重，愛護思想，優しい心を育むといった子どもの心を豊かにする効果が大きい
- 5．動物を飼育することで，自分の行動に責任をもち，忍耐力，自信，やる気を育む

と表している²³⁾。これらはいずれも獣医師の視点でみた意義である。小学校教諭である中本久代は，動物を飼育する目的を，

- 1．野生状態で観察が困難な動物の生態の観察を容易にする
- 2．動物の成長や変化を長期にわたり継続して観察する
- 3．動物の飼育を通して自然に興味・関心を持たせる
- 4．動物を慈しみ，生命を尊重する心情や態度を育てる

と表している²⁴⁾。以下は，中川美穂子が先進国での調査や各地の獣医師や教育者からの報告をまとめたものである²⁵⁾。ただし，動物に愛情を持って半年以上飼育した場合の効果としている。

- 1．愛する心の育成：情愛教育
- 2．命の大切さを学ばせる：生命尊重・責任感
- 3．人を思いやる心を養う：共感・謙虚・協力
- 4．動物への興味を養う：知識欲・科学心への刺

激・冷静な視点

- 5．ハブニングへの対応・工夫
 - 6．緊張を緩める：癒し・人間関係改善
 - 7．動物への接し方で，子どもの心の状態を知る
- * 1から6までの効果は，子どもと動物が心を通わせていないとみられない

以上みてきたように，様々な効果が動物飼育にはあげられているが，共通点は，生命尊重の心を育むことである。そして，章で検討したように，適切な環境で健康な動物を飼育した場合，慈しみ，思いやる心が育つと考えられる。

相違点は，教師側の飼育の意義は子どもへの学習効果に主軸を置いていることである。しかし，子どもの精神的な自立の基礎を養う場として動物飼育を捉えているだろうか。特に，動物の観察，興味に終始してしまっていないだろうか。獣医師側の飼育の意義には，愛護思想など，人と動物のかかわり方についても含まれていることが分かる。平成11年に成立し，施行された「動物の愛護及び管理に関する法律」²⁶⁾の基本原則第二条に「動物が命あるものであることにかんがみ，何人も，動物をみだりに殺し，傷つけ，又は苦しめることのないようにするのみでなく，人と動物の共生に配慮しつつ，その習性を考慮して適正に取り扱うようにしなければならない。」と示されているように，「人と動物の共生に配慮」した教育が今後，より求められていくだろう。

動物愛護の観点などを踏まえると，日本獣医師会学校飼育動物委員会が報告した「学校飼育活動の推進について」が，簡潔で理解しやすい。この報告では以下の五点の役割をあげている²⁷⁾。

- 1．生命観（動物飼育から学ぶ生命尊重の心）
- 2．動物観（動物の生理・生態，社会・経済活動と動物利用の関係）
- 3．社会観（動物愛護・福祉，食育・食農）
- 4．自然観（人と動物の共生）
- 5．人格形成（感性，社会性，協調性，責任感，自発性，判断力等）

以上のことから，生命観・動物観・人格形成のみならず，動物を慈しんで飼育し，より深いかかわりがあってこそ考えることのできる動物愛護といった社会観，人と動物の共生といった自然観も踏まえて各学校でより焦点化させた意義を設定することが効果的であると考える。いずれにしろ，これらは健康な動物と繰り返し関わり，子どもたちが愛情を感じてこそその効果であることを忘れず，生命尊重の教育の土台として改めて重要視したい。

生活科における生命尊重の教育

本章では、動物が適切に飼育されていることを前提に、章で述べた動物飼育における生命尊重の心が育つ仮説について、実践例を踏まえながら考察する。

1 子どもの現代的課題

内閣府の「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」(平成19年2月)は、平成11年と比較して「自分に自信がある」と答えた小中学生が減少していることを示した²⁸⁾。自分に自信がある日本の子どもが国際的にみて少なく、自らの将来や人間関係に不安を抱えている現状があるとしている。この「自分に自信がある」ということは、決して自分への過信や自分勝手を許容するものではない。現実から逃避したり、今の自分さえよければ良いといった『閉じた個』ではなく、自己と対話を重ね自分自身を深めつつ、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で生きるという自制を伴った『開かれた個』が重要である。他者、社会、自然・環境と共に生きているという実感や達成感が自信の源となる²⁹⁾と答申では述べられている。

「自分に自信がある子ども」という観点は、「自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができる」³⁰⁾という生活科の「精神的な自立」と関連させて、章(図1)の「自分をよりよく生きる」とことと考えることができるだろう。

2 生活科で育った精神的な自立の力

ここで、既述の「生活科で育った学力についての調査研究」³¹⁾の生活科で身に付いた力の調査のうち、全20項目のうちの表2で示す4項目の精神的な自立の項目について注目する。各学年で回答数が異なるため、学年毎に分けてグラフに表したものを図2～5とする。

表2 精神的な自立の4項目

- | | |
|-----|--|
| 17: | 自分の得意なことや友達のよいところに気付くことができるようになった |
| 18: | できないことに挑戦したり、少しぐらいの失敗でくじけず、ねばりづよく努力できるようになった |
| 19: | 自信をもって生活することができるようになった |
| 20: | 夢をもって生活することができるようになった |

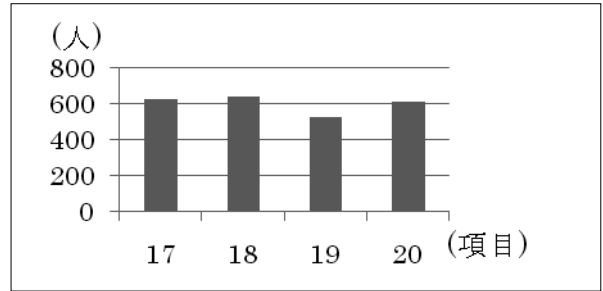


図2 小3の身に付いた精神的な自立の力
(回答者805名 回答率75.2%)

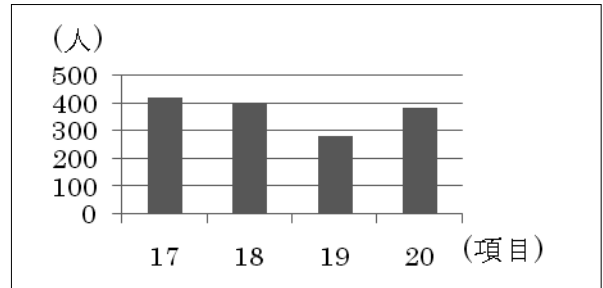


図3 小6の身に付いた精神的な自立の力
(回答者779名 回答率47.9%)

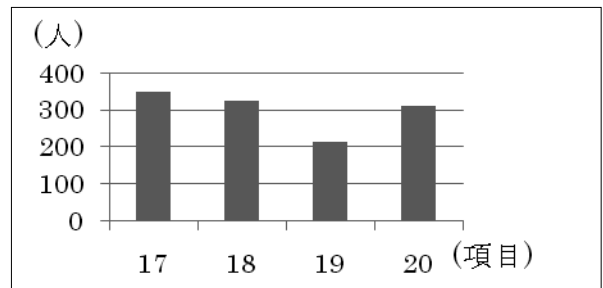


図4 中3の身に付いた精神的な自立の力
(回答者799名 回答率37.3%)

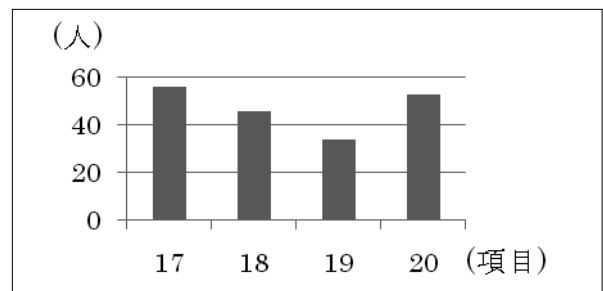


図5 高3の身に付いた精神的な自立の力
(回答数173名 回答率27.3%)

各学年で回答数、回答率は異なるが、いずれも項目19の「自信をもって生活することができるようになった」が少ない傾向にあることがわかる。この調査は、動物飼育を行った子どもに限定したものではないが、答申の報告や、表1の項目10「自信を持つ」事例が少なかったことと照らし合わせてみても子どもの自信の

育ちはそれほど大きくないと考察できる。

答申では子どもたちが他者，社会，自然・環境とのかかわりの中で，これらと共に生きる自分への自信を持たせる必要性から，言語能力の育成のほか，「他者，社会，自然・環境との直接的なかかわりという点で極めて重要とされている体験活動は，活動しただけで終わりにするのではなく，体験したことを，自己と対話しながらか，文章で表現し，伝え合う中で他者と共有し広い認識につながることを重視する必要がある」³²⁾と述べている。

項目17の「自分の得意なことや友達のよいところに気付くことができるようになった」はどの学年においても高いことから，動物飼育の場面においても友達や動物とかかわりながら得意なことや友達の良いところを表現し伝え合い，共有する中で子どもの自信の育ちを支援できる場面が多いと期待できる。

3 生活科の実践例

動物飼育の場面において，友達や動物とかかわりながら「自分の得意なことや友達のよいところに気付くことができるようになった」ことを表現し伝え合い，共有する中で子どもの自信の育ちがみえる実践例を紹介する。

愛知県額田郡幸田町立豊坂小学校は「自己有用感をもち，たくましく生きる子の育成」を研究テーマ（平成16～18年）としている³³⁾。副主題は「共に認め合う学び合いを通して」である。

ここでの自己有用感とは，自分に対する自信（自己肯定感） みんなから受け入れられている，みんなの役に立っているという実感（他者受容感） みんなといっしょに活動することで育まれた充足感（他者共生感）と定義されている。

2年生生活科「カタツムリ 大すき」³⁴⁾の実践では，抽出児A男の成長を焦点に報告されている。A男は，学習意欲があり，何事にもていねいに取り組む。みんなの前で自分の意見を言うより，聞き手に回ることが多かったが，少しずつ発言しようとし始めている児童である。

この単元では，一人一人が自分で見つけた「My カタツムリ」を飼育する。単元の各段階で「自己有用感のしかけ」が設定されており，カタツムリを探しに行く段階の自己有用感へのしかけは「自分のカタツムリを探しに行くことで，これからカタツムリの学習をしていくんだという意欲を高めさせる」である。一人一人が，自分で見つけた「My カタツムリ」を持つことで，カタツムリに愛着を持ち，これからしっかりお世話をしていこうという意欲を感じさせられたようであった。

次の段階では，「友達同士，見合ったり教え合ったりする場を設定する」ことが自己有用感のしかけである。

以下はA男とB子のやりとりである。

B子 何でそんなに葉っぱばかり入れてるの。
A男 だって，ぼくのカタツムリは，葉っぱばかりのところにいたから，葉っぱをたくさん入れてあげたんだ。
B子 へええ。そうするといいんだ。

B子と話し終わった後のA男は，ちょっと得意気だったという。自分の知っていることを友達に教えてあげるといことで，少しずつ友達とかかわりを持つという意識につながっていった。その一週間後，カタツムリの自慢大会が開かれる。「たくさんの『自慢』が出てくるように，前時までに『カタツムリと遊ぶ活動』を多く取り入れる」ことを自己有用感へのしかけとしている。

また，「カタツムリ自慢大会」では，自分のカタツムリの自慢をするだけでなく，友達のカタツムリの自慢を聞き，自分の知らなかったカタツムリの行動を友達の発表から知ったり考えたりすることで，子ども同士がかかわり合う場が多くみられるようになってきた。

単元最初の方では，1人でカタツムリを観察したり遊んだりしていることの多かったA男だが，だんだん，席の近いC男と一緒に飼育ケースの中を掃除したり，お互いのカタツムリを遊ばせたりするなど，かわる場面が見られるようになってきた。

『自慢大会』では，カタツムリを提示しながら，分かりやすく説明できるようにさせ，その都度自分のカタツムリと比べたりする時間を設定する」ことが自己有用感へのしかけであった。カタツムリの自慢大会では以下のやりとりがあった。

T 他に自慢のある子いるかな。
A男 ぼくのカタツムリは，放っておくとすぐ逃げちゃうから，遊び方を考えて，定規で遊び方を考えたよ（カタツムリを上手に定規の上をはわせる競争）。
T へえ。A男君やってみてくれる。
A男 うん。みんなの前でやってみる。C男君も一緒にやる。

カタツムリが動き出すとA男は周りの歓声をあびた。授業後の振り返りにおいても多くの子が「遊び方がおもしろかった」「よくあんなゲームを考えたな」など，A男の考えを認めていた。A男自身，「じょうぎでカタツムリをあそばせるのがすごい工夫うと思いました。すごく大切に思いました。」と記している。単元の初めの段階では聞き手に回ることの多かったA男の様子と比べると，伝えようとする姿勢が強くなっていることがわかる。

最後に、今まで学習してきたことを、他学級の子たちに紹介する場面が設定されている。ここでの自己有用感へのしかけは「一人ではなく、グループを組むことで、困ったときには声をかけあったり教え合ったりできるようにする」ことである。A男は4人グループで紙芝居を作る中で、同じグループの子に、カタツムリの描き方や、その時のカタツムリの様子などをアドバイスしていたようである。A男の単元後の振り返りには、「カタツムリさん、大すきです。ぼくは、がんばってせわをしていたんだなって思いました。カタツムリの絵や、カタツムリのかんさつやカタツムリのあそばせ方をがんばって考えたんだなって思いました。みんながじょうぎであそんでくれて、よかったなって思いました。これからがんばるぞって思いました。」と、カタツムリとの深いかかわりや、友達に受け入れながらのかかわりの中で育まれた自信、これからの意欲的な態度がうかがえる。

ここで注目したい点は、単元初めに教師が「自分や友達の良さを知っていく中で、自分の意見を自信をもって発表し、自分だけでなく、みんなで学習している喜びを感じて欲しい」と願っている点である。自己有用感へのしかけと共に、「自分の意見を自信をもって発表する」ことが念頭にあったからこそ子どもの自己有用感を見取ることのできる実践となったと考えられる。

特に、この実践は生き物に親しみをもち、大切にすただけでなく、平成20年度に改訂された生活科の指導要領において新設された

(3) 身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気づき、意欲と自信をもって生活することができるようになる。

という学年の目標を実現できていると考える³⁵⁾。

この生活科の学年の目標(3)は、これまで「自分の成長」に関する単元のみで扱われる傾向が強かったものの、今後はどの単元においても自分自身への気づきを考慮に入れた指導が必要になると指摘されている³⁶⁾。動物飼育においても自分のよさや可能性に気づけるような取り組みが可能であり、友達とのかかわりを意識した活動を目指すことで「自分をよりよく生きる」支援となるだろう。

また、豊坂小学校は、表3、4のように、共に認め合う学び合いの成立のための手立ての一つとして、「自己有用感の見取りの指標」³⁷⁾を作成している。これは自己有用感をもった子どもの姿を教師が見取り、共有し単元構想作りに生かすための、実践を基に作られた指標である。低学年、中学年、高学年毎に指標が示されているが、本稿では低学年の指標のみ抜粋した。

表3 豊坂小学校の自己有用感見取りの指標
(低学年) 自分を見つめる

自分を見つめる	
つかむ	○自分の考えをもととする 「～をみつけたよ。」 「～ができるようになったよ。」 「早くみんなに言いたいな。」
ふかめる	○自分の考えを伝えようとする 「自分もできてよかった。」 「自分ってすごい。」 「分かるようになって楽しい。」
いかす	○自分の成長を感じようとする 「～ができるようになった。うれしいな。」 「勉強っておもしろいな。」 「もっと、～してみたいな。」

表4 豊坂小学校の自己有用感見取りの指標
(低学年) 友達とかかわる

友達とかかわる	
つかむ	○友達の良さに気付こうとする 「あいいいな。まねしたいな。」 「生き物はかわいいな。」 「友達(生き物)は～だな。」
ふかめる	○友達から学ぼうとする 「友達はすごいね。～だから。」 「友達のおかげで～できた。」 「～ががんばっているところを見ると自分もできると思う。」
いかす	○友達と仲良く学ぼうとする 「自分もがんばるから～もがんばってね。」 「友達といっしょにやると楽しい。」 「友達のおかげで～できた。」

この指標(表3)で表わされていることを動物飼育の場合にあてはめて考えると、「チャボにさわれるようになったよ」「ぼくもウサギのはがみえたよ」「もっとなかよくなりたいな」などと子どもは自分を見つめる。

また、表4の場合では「カタツムリはいっぱいあるよ」「君はいろんなはっけんをしていてすごい」「(かっているウサギが力をくれたから)いっしょにいたおもいでを、みんなの前で言えたよ」などと子どもは友達や動物とかかわるだろう。表4のつかむ段階で「友達(生き物)は～だな。」と表わされているように、動物飼育の場合では「友達」を「生き物」と置き換えて自己有用感を見取することもできるだろう。動物飼育の場合では、触れあう段階、世話をする段階、発表をする段階などにおいて、友達とも動物ともかかわり、自己有用感を得る機会、それに伴う子ども自身の精神

的な自立を感じられる機会が多いのではないかと考えられる。

この実践では、「My カタツムリ」というように、自分のカタツムリに愛着がもてる出合わせであること、十分な体験が行われていること、友達との深いかわりがあったこと、教師の願い、見取りの指標があったことによって、仮説で考えたように自分に自信を持ち、自分や仲間とよりよく生きる単元となったことがうかがえる。

研究のまとめと今後の展望

子どもとかわらせる動物は適切な環境で飼育される健康な動物が望ましいこと、動物の観察だけでなく愛護の視点からも生活科における動物飼育を行う必要性、自分をよりよく生き、友達、動物とかわる中で精神的な自立の基礎を養うことが生命尊重の教育といえることを述べてきた。

平成20年3月に告示された新しい小学校学習指導要領における、生活科の改訂点であり、動物飼育を行う中で考慮すべき点を三点述べる。一点目は、

第2の内容の(7)については、2学年にわたって取り扱うものとし、動物や植物へのかかわり方が深まるよう継続的な飼育、栽培を行うようにすること

³⁸⁾が指導計画の作成時に配慮する事項として述べられた点である。1章で述べたように、飼育活動の取り扱いが植物栽培が7割強、動物飼育が3割弱となるのではなく、「動物を飼ったり植物を育てたりとは、飼育と栽培のどちらか一方を行うのではなく、2年間の見通しをもちながら両方を確実にやっていくこと」³⁹⁾が意味されている。特に動物飼育は友達やクラスの仲間、教師、学校全体、家族、地域の獣医師などと協力して行うものであり、決して一人だけでは成立しない。「継続的な飼育」を行う際には、実践例の豊坂小学校で述べたような現在よりも明確な指導目的が必要になってくるだろう。各学校で条件は異なっても、自他の生命を尊重できるようなかわりを持つ動物飼育を目指したい。

二点目は、新しい内容(8)として、

自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝えあう活動を行い、身近な人々とかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする

⁴⁰⁾ことが加えられた点である。伝えあう活動では、「自分自身で体験したり活動したりして、感じたことや気付いたりわかったりしたこと、考えたこと、もっと知りたいこと思ったことなどを伝え合い、交流する活動

が行われるようにすることが大切」⁴¹⁾にされている。さらに、「表情やしぐさ、態度といった言葉によらない部分」も大切にされていることから、動物飼育においても自他の生命を尊ぶ活動に欠かすことのできないと考えられる仲間(=友達・動物)との「感情の交流」も重視して活動していきたい。

三点目は、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳活動の密接な関連が強調されている点である。生活科においても、指導計画の作成と内容の取扱い1(4)には、

第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、生活科の特質に応じて適切な指導をすること

⁴²⁾と述べられている。「学校の教育課程は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間からなっている。すべての教育課程の中で効果的な体験活動を通して、生き物の成長の様子や生活の仕方、そして死に関して実感できるようにすることが大切である」⁴³⁾と鳩貝太郎が述べているように、今後は小学校課程全体を通した指導計画も視野に入れて考えていきたい。

特に、「人と動物の共生に配慮」した教育は生活科の二年間だけで行うものではなく、各学年の発達段階に応じて考えていきたい。例えば、飼育に関する法律、動物の里親探しの取り組み、野生動物との関係、発展して自然とのかかわりなどを考えることも有効であろう。

しかし、各学年、各学校に応じた動物の選定や各学校の予算、現在飼育している動物の管理、死と向き合わせる際の留意点など、課題は多い。今後は、そういった動物の生活環境、つまり動物の福祉も視野に入れた動物飼育活動を実践するために必要な手立てを検証していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」2008年 p.34
- 2) 嶋野道弘『生命尊重の心をはぐくむ 低学年』東洋館出版社 2006年 p.32
- 3) 上掲書 2) p.1
- 4) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申) 2008年1月17日 pp.92-93
- 5) 中川美穂子「小学校での動物飼育の意義と獣医師による飼育支援」日本生物教育学会『生物教育』第43巻 第3号 2003年 pp.141-142
- 6) 野田敦敬他「生活科で育った学力についての調査研究」平成15・16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号:15530578 研究成果報告書 2005年 pp.6-11
- 7) 野田敦敬「生活科学習の充実と改善」愛知教育大学生生活科教育講座紀要 第3号 2005年 p.21

- 8) 上掲書 2) p.9
- 9) 近藤卓「「生きる力」を支える自尊感情」金子書房『児童心理』第61巻 第10号 2007年 pp.43-47
- 10) 永田繁雄『「じぶん」「いのち」「なかま」を見つめる道徳授業』教育出版 2007年 pp.2-6
- 11) 嶋野道弘「生活科における生命尊重の指導と動物飼育」嶋貝太郎・中川美穂子『学校飼育動物と生命尊重の指導』教育開発研究所 2003年 pp.14-15
- 12) 高山直秀『子どもと育てる飼育動物』メディカ出版 2001年 p.12
- 13) 上掲書 12) p.20
- 14) 中川美穂子『学校飼育動物のすべて』ファームプレス 2001年 pp.18-20
- 15) 「学校飼育動物活動の推進について」日本獣医師会 2005年 p.1
- 16) 『学校飼育動物の診療ハンドブック』日本獣医師会 2000年 p.15
- 17) 岡崎市現職研修委員会 生活科基礎研修会資料 2007年
- 18) 上掲書 1) p.36
- 19) 無藤隆「命の教育のための学校飼育のあり方」全国学校動物飼育研究会『動物飼育と教育』第3号 2005年 pp.3-7
- 20) 仙台市特定非営利活動法人エーキューブ 動物介在活動ボランティアセミナーと特別講演会 資料2007年
- 21) 上掲書 12) p.19
- 22) 中川美穂子「獣医師からみた学校飼育動物の意義」上掲書 11) pp.42-45
- 23) 上掲書 12) pp.19-20
- 24) 寺尾慎一『生活科・総合的学習重要用語300の基礎知識』明治図書出版 2001年 p.215
- 25) 上掲書 5) p.140
- 26) 「動物の愛護及び管理に関する法律」2006年6月1日施行
- 27) 上掲書 15) p.5
- 28) 上掲書 4) p.15
- 29) 上掲書 4) p.29
- 30) 上掲書 1) p.13
- 31) 上掲書 6) pp.6-15
- 32) 上掲書 4) pp.28-29
- 33) 愛知県額田郡幸田町立豊坂小学校 研究紀要「自己有用感をもち、たくましく生きる子の育成」2006年 p.8
- 34) 上掲書 33) pp.27-28
- 35) 上掲書 1) p.17
- 36) 『新学習指導要領ハンドブック小学校』時事通信社 2008年 p.105
- 37) 上掲書 33) p.8
- 38) 上掲書 1) pp.42-43
- 39) 上掲書 1) p.34
- 40) 上掲書 1) p.36
- 41) 上掲書 1) p.37
- 42) 上掲書 1) p.45
- 43) 全国学校飼育動物研究会「学校・園での動物飼育の効果」緑書房 2006年 p.183

(2008年9月17日受理)